

資料紹介

小室梅尾「会津籠城絵詞」——会津藩の女中が記録した籠城戦の体験——

\*阿部 綾子

1. はじめに

平成三〇年は戊辰戦争及び明治維新から一五〇年の節目の年であり、当館でも秋に「戊辰戦争一五〇年」と題する展覧会を開催した（九月一日〜一月一四日）。同展は新潟県立歴史博物館・仙台市博物館との共同企画展であり、図録も共同で作製している。この展覧会の準備の過程で東京大学史料編纂所に「会津籠城絵詞」という謄写資料があることを知り、調査を行った。その結果、当該資料の原本は戊辰戦争で約一ヶ月に及ぶ会津籠城戦に参加した小室梅尾という女性が作者であり、彼女が自身の経験を六場面の絵と文章として詳しく記録し残したものであることが分かった。これまで籠城戦の最中の城中の様子を描いた絵画資料がほとんど知られていないことと、原本が所在不明であることから、謄写本ではあるが展覧会では六場面の絵をすべてパネルで紹介し、かつ図録にもカラー図版を掲載した。ただし展覧会及び図録では、女性ならではの目線で書かれた特徴ある文章まで紹介する余裕がなかった。本稿ではそれを補うために、改めて文章を交えた資料紹介を行うものである。

2. 作者の小室梅尾について

慶応四年（一八六八）八月二三日に始まった籠城戦では、会津藩主松平容保（表向きには容保は鳥羽伏見開戦後の慶応四年二月に隠居し、養子の松平喜徳が藩主となっていた。しかし、実際はその後も容保が藩の采配をふるっていた）の義姉である照姫が、城中の女性たちの指揮にあたったことが知られている。小室梅尾は会津藩の公用人である小室金吾當節（まごむね）の妹で、照姫附の女中（若年寄）をつとめ、籠城にあたり姫に従って入城した。同年九月二日に会津藩が降伏・開城すると、照姫は一旦城下の妙国寺で謹慎してから町家に移り、さらに翌明治二年三月から同年一二月までの間、東京の紀州藩邸で謹慎した。梅尾は「会津籠城絵詞」の末尾に「明治二年 あくるとし、わか山のみたちにてしるす、照姫君御あつけにならせ給し紀州家青山の邸也」

と記していることから、明治二年には照姫とともに紀州藩邸におり、そこでこの記録を書いたことがうかがえる。ちなみに「あくる年」とは戊辰戦争の翌年のことで、「明治二年」の説明として書き加えたものと考えられる。梅尾が籠城戦から一年経つか経たないかという時期に、早々にこの記録を残したことが分かる。なお梅尾がこの記録にとりかかった理由を文中より意識すれば、「前代未聞の経験をしたが、月日の経過とともに戦争が過去のこととなってしまう。「物語り」だけでは実態が伝わらないため、特に戦死者の子孫に対し、絵で見せて戦争を忘れぬよう、つたないながら絵筆をとった」となる。梅尾は上手な絵師の描き直しを願いつつ、筆を置いた。その後、梅尾がどのような人生をたどったのか詳細は不明である。また梅尾が残した原本も現在は行方が分からないが、大正六年に謄写が行われたことよって、彼女の意思は現在まで伝えられることとなった。

3. 東京大学史料編纂所本「会津籠城絵詞」について

今回紹介するのは、東京大学史料編纂所所蔵の謄写本である（請求記号…維新史料引継本Ⅱとー12ー1）。現状は和綴本で、本紙には維新史料編纂会の用箋が使用されている。維新史料編纂会が大正六年に謄写した時、原本の所蔵者は東京在住の「浦川篤」という人物であった。謄写時の付記「浦川氏直談」によれば、この人物は小室梅尾の甥という。浦川は、先に紹介した小室梅尾の簡単な経歴と、梅尾の入城時の状況とを伝えている。それによると、照姫は郭内本丸の外部にあった御用屋敷に住んでおり、入城時は梅尾より上の立場であった老女を伴って城中に入ったという。梅尾は後片付けをしてから、少し遅れて太鼓門より入城したとする。梅尾が描いた六場面の絵の最初のシーンは梅尾が御用屋敷を出てお城へ向かう場面であった。では早速、絵と文章について、それぞれまとめて紹介していきたい。

\*福島県立博物館



4. 「会津籠城絵詞」絵部分紹介（絵番号①）⑥は便宜的に付した）  
①八月廿三日朝、御用やしきまうつみ御門へ入て、御城へ行所、御跡かたつ  
けたる後「八月廿三日朝、御用屋敷より埋御門より入て、御城へ行く所、  
御跡片付けたる後」



②東の御上手やさま、小山田近方せん地見る所  
「東の御上手矢狭間より、小田山近方戦地見る所」





③ 御城内奥老女つめ所前の所御さひ所にてたき出し、づのこたく台をして兵ろうこしらへる所  
 「御城内奥老女詰め所前の所御さひ所（御在所カ）にて炊き出し、図の如く台をして兵糧拵える所」



④ 奥御座敷御伏籠にやきくさ用意、ほうたい等こしらへる所  
 「奥御座敷御伏籠に焼草用意、包帯等拵える所」



⑤御座外廻り御いりかは通行のづ  
〔御座外廻り御入側通行の図〕



⑥表御座御所いん、手おひ病院のづ、看病婦ははした女也  
〔表御座御書院、手負い病院の図、看病婦は端女也〕



5. 「会津籠城絵詞」文章紹介

これより文章部分の紹介を行う。なお、文章のまとまりごとに置いた小見出し(一)は筆者が付したものである。また読点や中黒を付して適宜文章を整え、片仮名はすべて平仮名とした。仮名ばかりで分かりにくい箇所などには註記(一)した。罫字は一字アケとし、合わせ字の夕(より)はそのまま表記した。

【①会津藩の趨勢】

いにしへのみたれたる世々のいくさ物かたりは、さま／＼のゑまき物「絵巻物」にみもし、き、もせしか、後の世は知らず、大よそ此度のいくさほどおそろしきはあらず、こと国「異国」のまじはりひらけはしまりてよりは、いまた日の本に聞もならぬ大つ、小つ、「大筒・小筒」いくさにべんりよきを、こと国人のたくみにたくみたるを、大君のいくさのいきほひ「勢い」に、あつめにあつめ給ひしを、すぐれたるもの、ふ国々よりきそひあつまりて、みことのりをいた、き、一つの城はものかはと日夜せめたつる、その中に三十日かあひたこもり、つ、かなき「恙なき」は、天もあはれと助け給ひたるか、我 君春よりのおめい「汚名」をこふむり給ひしをひたすらたかん「嘆願」なし給ひ、近国の方々をも頼み給ひ、数通のたんかんもたゞ中と「中途」にてとだえ、かん軍「官軍」日増に近国にせまり、いまはいかんともする事あたはず、つひにかく籠城とまでなりぬるも、君の御心には恐入給ふのみ、いまははや臣たちも命をすて、重代の御恩此ときと力をつくす、只君たちの御つ、かなきを願ふのみ、君たちのあはれみふか、りしは、此時にいはてしもあらはれて、かく日数こもり内に、かへり忠「返忠」の者などは壹人としてなきにてもしるべし、只春よりのおめいのはれ給ひ、晴天をみ給ふことをみ誰／＼も願ふのみ、いかにせん、近国のかた／＼さへ、みなかん軍となりぬれば、とてもすくひだになき一孤城、いかてかなふべきと、心にたれも思ふのみ、かん軍はあら手「新手」にあら手を入かへて日々夜々せめたてければ、いかてかなふべき、とても死をまつ外なきに、君はあまたの人の命をあはれと思へし、つみを御身に引うけ給ひ、軍門にくたり給ひしは、まさに「誠に」に恐お、しとも中々言葉につくしかたし、先年より京都七ヶ年の守ご御役中「京都守護職在任中」も、た、公武の御あひたから宜しく、かつ天下太平のことをのみ、ちうや「昼夜」飲食をもわすれ給ひ御心を尽し給ひしも、あらぬ行たかひ「行違ひ」よりかくおめいをこふむり給ひ、今日にいたること、いか成月日にや、老臣たちもれん名「連名」の

たんかん共々なりしが、かん軍聞きと、けるより九月廿二日といふにひらき給ふ、あまたの人々とてもなき命と思ひしも生て「生きて」出つるは 君の御めくみ城より生れ出しといはんか

【②入城後の姫君(照姫)と女性たち】

八月廿二日「八月二十三日の誤り」ろう城「籠城」のはしめ令、男はみなた、かひにのそめは「臨めば」、奥女中・女子は手をひかん病「手負い看病」より手おひのひやうろう「兵糧」手をつくす、大玉・小玉は聞なれて、物のかすとも思わす、まかなひの事なにくれと心尽くし、手おひのおもくて死せるを取かたつけまでもねんころに「懇ろに」なす事、中々に常の心にてみやつかへ「宮仕え」する者などに出来べき事ならねと、君がためとたれ／＼も思へは、ひたすら手をつくす、いとまある者は、めんざんし「綿撒糸」なとこしらへて、又やき玉等落るあたり心付、夫々ゆだんなく、かくいとまなければ、おやのなり行・子のゆくへしるよしもなく、又おやをうたれ兄をなくし弟をうしなふかなしみに、やすき心はあらねと、たづねもとむへきすべもなし、かかるをりには女子もお、しく「雄々しく」なりて男子をいさむる事もあり、初より家中の家内たちあまた入ぬれば、や、もすれはさはかしく「騒がしく」、一同にさわき立しんどう「振動」なすを、姫君は元より御心をすへ給ひし事なれば、すこしもどふじ「動じ」給はず、常は深窓にやしなはれ給う御身、やさしき事のみ見聞かせ給ふを、今日にいたりてはいとお、しくも心くはり給ふて、只御二君初あまたのもの、ふの勇しくもつ、かなかれ、只ひたすら神ほとけねき「祈ぎ」給ひておちつき給ふ、かく 姫君のよき御かくこ「覚悟」より、餘た「数多」の女子たちのとふよふ「動揺」もいつとなくしつまり、日数たつうち、夫々しらへ「調べ」も付て、御間ことに「誠に」をち付「落ち着く」こと、なりぬ、又四方より打こむ大つ、小つ、は、間ことに落入ぬ所なく、きのお迄ちりはめし「鏤めし」やかたも、けふはかべおち、なげしもそげて、見るに身のけもよだつ計の所もあり、はくらひ「舶来」のやせん玉「野戦玉」の著はつ「着発」には、わるれば中より数丸の小玉出さんらん「散乱」すれとも、人の身にはあたるはまれなり、やき玉は夫々ふせくやうひ「防ぐ用意」して衣類・もうせん「毛氈」等を水にひたしおき、是にてつ、む、又なべ・かま等をふせてけすなど、後にはなれて、おとろかぬ様になりたり

【③城内での二方の君(容保・喜徳)と照姫の居所】



式方の君は黒かね御門「黒金門・黒鉄門・鉄門」にきようへきつきて「胸壁築きてカ」御座宜しきやう、しつらひ参らせ入せ給ふ、姫君には家臣なにかしの申出て、東の方土手のわき高く大き成石かき「石垣」の上に土蔵有あたり、くつきやう「屈強」の所なりとて、此もとにかりの御座しつらひ、た、みあまたよせかけ、かたはらには米たはらあまたつみて、玉のはげしき所はふせくため、是にうつり給ふ、大玉はげしきをりは、御そばのわらは「童」にかづ「数」印させ給ふに、ある日は千七百余玉としるしぬ、小玉のかすは中々雨のごとくなれば、数などはおもひもよらす

#### 【④籠城中の二つの悲劇】

又こもりたる家中の者の内あはれなるは、手おひてかへりたるて、おや「父親」子共二人ありて、幼き乍もかひほう「介抱」なしいたるを、て、おやとてもたすかるすへなきをはかりて、子共ふたりをすかしねかして、うごかぬ身にてやう／＼そは成つ、に玉をこめて、おのれとうたれて死にぬ、子共ら音におとろき、めをさましてなきままとふ「泣き惑う」など、めもあてられず、あるははれつ「破裂」にあたりたる女房、ちのみ子「乳飲み子」をしようとめ「姑」にゆたねて、くすしよひてよ「薬師呼びてよ」とすかしやり、跡にていさきよくしがひ「自害」して死せるなど、かるき者のつま成よしなから、いさきよし、其中に心のほせ「逆上せ」、きようき「狂気」せし人もあるなどあはれなり、一すしに思ひせまりし心より、てんとう「転動」するもさもあるへきなれと、かゝる時は心のすはり「据わり」そ一大事なれ

#### 【⑤女子の働きについての老女の見解、領民の奉公】

あるはたけき「猛き」もの、ふの事ともあまたあれと、そは人々のしる事なればはしるさず、女子もたけくはやる人々もあれと、かねて聞、女子のたけきは男子のさまたけ、すゑ／＼のそしりのたねそと、只内の事共よく心くばりてよと、老女たちかたくいましめていくさには出さ、りけり、かゝるおりもしづ「賤」のおのこはさま／＼のさ、け物「捧げ物」もてきて奉る、雨のごとき玉の中、帰りにははかなくなる者も餘たあり、重代の御おんする百生「御恩知る百姓」の心いと／＼あつはれ「天晴れ」というへし

#### 【⑥会津藩の降伏、城外に立ち退いた人々の動向】

かくして日数ふれとも、いかにかせん、かん軍日々に弥増のみ、いたつらにたくはへ「貯え」のつきるをまちて、あまたの人の命すてん事を 君たちは

あはれみ給ひて、御つみを御身にうけて御こうふく「降伏」とはなりぬ、いと／＼恐有ことなり、御城の内はかゝるありさま、又ざひ方「在方」へ立のきしも、ちり／＼はら／＼に、おや子兄弟おち付方もあらはこそ、のにふし「野に伏し」山にあくかれて、父はいか、哉、子はいかに、兄弟おくれはとらぬかと、且さま／＼にまどふ「惑う」のみ、中にしんせつの百生あれば、ふしんせつの宿もあり、其内に産のけつきてやす／＼と出産する人もあり、只々城の方いか、哉と安し「案じ」思ふ内にも、城にてつく時のかね遠く聞こゆるをたよりにせしよしなども、跡にてかたりあふのみ、此おりはたよりきくよしもなし

#### 【⑦絵筆をとつた理由】

かゝる中にあひし「遭いし」身の、いきてふた、ひ世にあふも、御名すて給し君のめくみ、命すてしもの、ふゆへ、かく日数もしのきつれ、前代未聞のろう城にあひぬる身も、さる物は日々にうときならひ、中々わする、とはあらねと、年月たつうち、いつとなく遠さかりゆき、はて／＼子共たちは覚えぬことなれば、中々物かたりにては、いかてかゝる中に一日もいきてたゆとふべきと思ふ様にもなりゆかんことを思へは、いさ、か見聞せし事をつたなき筆にしるしおきて、討死のしそんの子たちに物かたらんよりは、ゑ「絵・画」にみせてわすれぬためにもと、くれ／＼もつたなき筆もかへりみす「顧みず」しるしぬ、後にあはれと見給ふ人あらは、よきゑたくみ「画工」の直してうつさせ給へと願ふ、あなかしこ

明治二年

小室

梅尾

あくる年

わか山のみたち「和歌山の御館」にてしるす

照姫君御あつけにならせ給し紀州家青山の邸也

(以下謄写時の付記)

「浦川氏直談

小室梅尾は公用人小室金吾當節アサノの妹、照姫君の御附にて若年寄なり、其上に一人の老女ありて姫君に御供して城中に入り、梅尾は後かたつけをすませて後に入城したるなり、門は太鼓門といふ、此門を入れば本城なり、門内右側に鐘楼ありしと云ふ、橋は木橋にあらざ土橋を是とす、浄書の際には改むるを要す、照姫御用屋敷は郭内本丸の外部にあり、照姫の居住なり小室梅尾ハ浦川篤氏の叔母に当る

6. まとめ

以上、絵と文章とをそれぞれ紹介してきたが、最後に内容を簡単にまとめておきたい。

まず絵の部分について述べる。

①は前述のように梅尾の入城場面である。気になるのは、絵には御用屋敷を出た後「うつみ御門」(埋門)より入城とあるが、「浦川氏直談」には門内右側に鐘楼のある「太鼓門」から入城とあることである。埋門は城の北側から三の丸に通じる門である。一方、太鼓門は北出丸から坂を登り帯郭に入る門で、帯郭には鐘撞堂がある。実際は埋門から入ると太鼓門をくぐらずとも本丸へ行けるので、埋門から入城した後、三の丸↓二の丸↓帯郭(太鼓門の脇をぬけて)↓本丸へと進んだということだろうか。なお検証が必要である。

②は、本丸東側の土手堀の矢狭間から、女性たちが小田山方面を見ている場面である(資料には小山田とあるが、小山田の転写ミスと思われる)。小山田は城の東側にある小山で敵軍の陣地があり、籠城戦中はここから城内に大砲が打ち込まれ、大きな被害が出た。山の上には大砲も描かれている。また絵の左側に米俵が積まれている箇所があるが、それは文章③によれば、照姫の仮御座であったという。本丸東側の土手脇の、高く大きな石垣の上に土蔵があるあたりが安全と家臣の進言があり、照姫は畳をたくさん寄せかけ、米俵もたくさん積んだこの場所に移動したとする。籠城戦中の照姫の居所はあまり知られておらず、貴重な証言である。

③は、女性たちが城内の奥老女詰所前の「御さひ所」(御在所カ)で炊き出しをする場面である。桶と板などを利用して即席の台をつくり、握り飯を作ったり、大根を刻んだり、鍋を火にかける女性たちが描かれている。

④は奥御座敷に伏籠を用いて焼草を準備したり、包帯を縫っている場面という。焼草は薪など燃料のことで、傷病兵の看護用に集められているものと考えられる。奥御座敷の外側にはやはり畳が立てかけられたり俵が積まれたりしており、大砲に備え部屋が補強されている様子が見える。

⑤は御座外廻りの入側(縁座敷)を、人々が通行している場面である。鉄砲を携行した警備兵、握り飯を肩に乗せて運ぶ女性、手を負傷した藩士とその人物にかけよる子どもなどが描かれている。負傷兵と子どもは親子であろうか。ようやく会えたのか、互いを心配するような心配が感じられる。御座はまん幕で覆われ、その中には布団のような描写がある。

⑥は表御座御書院だけが人を収容し、女性たちが看病している場面である。

湯を沸かす女性、病人を看る女性、握り飯や汁物を配る女性が甲斐甲斐しく働く。けが人の中には、横たわったままの人、布団の上に起き直り食事をしている人、包帯で顎を押さえている人などが描かれている。

以上、六場面をざっと見てきたが、これを踏まえて、次に文章を詳しく見てみよう。

文章の①は、会津籠城戦に至る会津藩の趨勢についての、梅尾の見解である。過去に見聞した戦の中で、今回の戦程恐ろしいものはないだろうと述べている。理由として、外国のすぐれた武器をたくさん集め、国中から武士が集まって日夜一つの城を攻め立てているからという。梅尾は、汚名をうけた容保が何度も嘆願を重ねたが、嘆願書が途中で途絶えて最後まで届かず、その中で官軍がだんだん会津に迫ってきて、どうすることもできず籠城となったと状況を捉えていた。重代のご恩を返そうと力を尽くし、藩主家の汚名返上を願う家臣の気持ちも書き添えている。命なきものと覚悟の籠城戦も、生きて城から出ることができたのは、罪を一身に受けた容保の恵みとの所感であった。

②は、籠城戦中の照姫や女性たちのようすを記している。城中での奥女中や女子の仕事は、けが人の看病や兵糧作りなどであった。看病や兵糧作り、それに関わる仕事については、絵③④にその様子が描かれている。他に綿撒糸(綿布の糸をほぐし、薬液に浸して傷口に用いる)作り、城内に打ち込まれる焼き玉の処理なども行い、それぞれ自分の親や子など、身内の情報を知る暇もすべなかつた。こうした状況下で、照姫は少しも動じず落ち着き、女性たちの動揺を鎮めたという。なお舶来の野戦玉は、割れば中から小玉が出てきて散乱するものの人に当たるとは稀だったと記される。焼き玉は水に浸しておいた布で包んだり鍋釜を伏せて消した。

③は、城内での二方の君(容保・喜徳)と照姫の居所に触れている。容保・喜徳は鉄門内を居所としていた。照姫は、先に絵②の所で触れたように、家臣の進言により、本丸東側の土手内に畳や米俵などで補強した居所に移動したという。大玉が激しく打ち込まれた日には、お側の童に数えさせたら、千七百発余りとなったとする。

④では、籠城中に見聞した悲しい出来事を二つ記している。一つは、けがをして城内に戻った藩士とその二人の子どもの話である。子ども二人は幼いながら父親の介抱をしていたが、父親は自分が助かる見込みがないため、子どもをなだめて寝かせた後、鉄砲で自死したという。梅尾は、音で目を覚まして泣きじゃくる子どもたちの様子を記している。もう一つは、城中に打ち

込まれた破裂玉にあたった女性の話である。女性は乳飲み子を姑に託して医者を呼ぶように頼み、その間に自害したという。このように籠城戦では、自分の命が助からないと判断した場合には、混乱の最中に足手まといにならないよう、自ら命を絶つ者もいた。

⑤では、女性の働きについて、奥女中の考えとして注目される見解が記されている。梅尾は老女たちから、「女子のたけき」は男子の妨げになり、後々そしりを受けることになるので、ただ「内の事」に心を配るようになっていたという。会津藩の女性たちの中には、山本八重（後の新島八重）や娘子軍のように戦いに参加した人たちもいるが、奥女中たちは女性が戦いに加わることに否定的な見解を持っていたことが分かる。また梅尾は、領民の中には城中に様々な捧げ物を持つてくる人々がいたことも記している。鉄砲玉が雨のように降る中、婦りに亡くなる人もいたという。梅尾はこうした「重代の御おんしる百生の心いとく／＼あつはれ」と評価している。

⑥は、会津藩の降伏や城外に立ち退いた人たちの動向についてである。籠城戦中、城内では右に見てきたような出来事が起こっていたが、城外にいた人も、さまざまに苦労したという。野山をさまよひ、身内を探し、親切な領民に宿を提供してもらえぬ人もあれば、そうでない場合もあり、この最中に出産する人もあった。彼等は城内を心配し、城内から聞こえる鐘の音を遠く聞いて心のよすがとしたという。梅尾は、後にそうした話を耳にして、ここに記したのである。

⑦は、梅尾が絵筆をとった理由が記されており、内容は冒頭で紹介した通りである。ポイントとなる一文を示せば、「いさ、か見聞せし事をつたなき筆にしるしおきて、討死のしその子たちに物かたらんよりは、ゑにみせてわすれぬために」の部分になるだろう。梅尾は、前代未聞の想像を絶する経験を、会津藩の戦死者の子孫たちに伝えてゆきたいと考え、かつ想像しがたいことであるからこそ、物語ではなく絵で残したいと考えたのであった。

以上、資料を紹介してきたが、梅尾が戦争の翌年にこの記録をまとめたことは注目に値する。会津藩の降伏後、藩士たちは、明治二年から三年春頃にかけて、諸藩に預けられ謹慎していた。こうした中藩士たちには、謹慎先で記録をまとめたり、書籍を写したりしている例が多く見受けられる。例えば、高田藩（上越市）で謹慎していた者が、謹慎先で会津藩の戦死者名簿を写し残したりしているごとくである。「会津籠城絵詞」もそうした中で生まれた記録の一つと考えられるが、女性の目線で早い時期に、かつ絵を交えて記録していることが特筆される。今後資料活用されることを願ひ、摺筆したい。

## ○付記

・本稿の作成にあたり、資料紹介の許可を頂いた東京大学史料編纂所に謝意を表したい。

・本稿は奥会津只見戊辰一五〇周年記念事業実行委員会・只見町が主催した「戊辰セミナー 第二回 戊辰戦争―会津での戦い」（令和元年八月二五日に只見振興センターで開催）での講演内容に手を加えたものである。